

社長メッセージ



日本赤十字社
社長 近衛 忠輝

第54回日赤医学会総会に寄せて

「人工知能の時代にこそ人の手のぬくもりを～未来への懸け橋」をテーマに、第54回日赤医学会総会が、名古屋市で開催されることを大変嬉しく思います。

人は誰しも、「手のぬくもり」の不思議な力を感じたことがあるでしょう。「手」を患部などに「当てる」ことによって、心身の苦しみや痛みが和らぐと、昔から言われています。特に赤十字職員やボランティアは、「手のぬくもり」によって人を癒した経験者が多いのではないのでしょうか。しかし、戦場や災害などの非日常の状況下では、「手のぬくもり」でも癒せない傷、苦しみ、痛みに直面し、人々は受け止めきれないほど大きな心身のダメージを受けます。

1863年、赤十字は戦場に傷つく人々を救護するため、人類共通の人道の規範であるジュネーブ条約を柱に誕生しました。その後、各国の赤十字社は、戦争における活動を展開します。日本も同様に、1877年に「西郷どん」が最期を遂げた西南戦争の最中、日赤の前身である博愛社が設立されました。日本赤十字社は、戦時救護のためには、日ごろから救護員を養成する必要があるとし、病院を設立し、結核や伝染病の予防、治療を行い、貧困患者への社会奉仕等の活動を展開するようになります。そして日赤は、各国の赤十字社の中で最初に災害救護活動に踏み切りました。国際赤十字のパイオニアという訳です。

第一次世界大戦が終結すると、人々の間には恒久平和への期待が高まり、もう赤十字の役割は終わったとの声が上がりました。赤十字国際委員会（ICRC）は、戦争がなくなることは無い、との考えでしたから、そのまま戦時の活動を継続しました。しかしそのとき、それまでに培った経験と人材を平和なときにも活かすべき、との考えも浮上し、この流れを汲んだ日赤をはじめ、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、の5社が中心となって、平時の赤十字活動を目的とする、現在の国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）を設立しました。それによって、IFRCとICRCの両者が手を携えて活動するようになり、来年はIFRCが100周年を迎えます。今や、その加盟社数は191カ国にのぼり、それぞれが災害救護、医療、血液、福祉、健康、安全、ボランティア活動等を展開し、赤十字は世界で最大規模の人道活動のネットワークとなっています。

2009年から昨年までの8年間に亘り、私はアジア人初の国際赤十字・赤新月社連盟会長としての役割を果たすことが出来ました。これは日本赤十字社の活動に対する、世界中の赤十字の仲間たちからの

信頼がなければ、成し得なかったことです。皆さんの日々の活動が世界につながっていることを、ここに改めて感謝を込めて、ご報告します。

赤十字は今、人口増加や難民の流入、移住人口の増加、政治の混乱や社会の摩擦、貧困、自然災害の増大等の大きな課題に直面しています。日本は総人口が減少し、世界に例の無いほどの少子高齢社会になっており、状況は更に進むことが予想されます。日赤は、国内外での活動経験の蓄積の上に、最先端の技術を磨きつつも、今後も変わらず必要となるであろう、「手のぬくもり」を忘れずに、赤十字の使命を果たすことが求められます。

平成最後の、新たな時代の節目の医学会総会にあたり、皆さんには、私たちが目指すべき赤十字らしい医療について、大いに議論していただくことを期待しております。2日間にわたる日赤医学会総会の盛会と成功を祈念しています。